

白金蔭

二月号



平成24年2月発行 第12号

白金葭月例句会案内

月例句会報、12／2／17 公魚、建国記念日8名欠5)

飯田孝三

三月十六日(金) 12:00 ~ 15:00 (アビスター第五学習室)

兼題: 蜥蜴出づ、牡丹の芽

四月二十日(金) 12:00 ~ 15:00 (アビスター第3学習室)

兼題: 仏生会(花御堂、甘茶)、豆の花

五月十八日(金) 12:00 ~ 18:00 (アビスター第3~4学習室)

兼題: 祭、葵(野火の普野主宰出席の拡大句会予定)

兼題の参考句 (三月十六日分)

地虫出づ夢を叶へよアンダシテ

己が影を慕うて這ぐる地虫かな

人の世につかずはなれず地虫出づ

憧れの宇宙へ地虫穴を出づ

蜥蜴出づそのぬれいのを人に媚び

蜥蜴出づ砂糖工場の裾を攀ぎ

蜥蜴出づ新しき家の主を眄たり

ビールの姫様かむり牡丹の芽

何はともあれ匂いをほどく牡丹の芽

大安のこの赤剥けの牡丹の芽

神苑に小さき炎の牡丹の芽

能村登西郎
池田すみ子

和田住美枝
村上鬼城

清水八重子
清水道徑

秋晴

石田波郷
山口誓子

阿波野青畝

菅原俊夫
中村和弘

津波跡癒えず建国記念の日
公魚の釣られて宙に透きとほる
寒林に一語一語の小鳥かな
白鳥の発つ気配あり建国日

布施弁天一茶も見たる老椿

増田陽一

増田悦子

明治村行つたことなし雪が降る

公魚や風を孕みて帆まさら

津波禍の地（つち）に白梅建国日

毛繕ふ肉球の明るさ春隣

がくと肩こきと肘鬼やらひかな

マスクする人に挟まれ建国日

黒田彰一

建国記念日遠富士をテラスより

猫が道よぎる建国記念の日

公魚の釣れたる穴の薄氷

公魚の三匹釣れててん。さらす

学食に公魚てん。さら出初めたる

光成高志

公魚きらきら湖面は放射能
春めきて天変地異説騒ぎ出す
建国日立ち直るかな日本は
怖いなんてもう言わないで春の海

春の風邪薺てふ虫の棲むと云ふ

杉浦弥栄子

公魚釣
おそ 獺の祭りの如く釣り

建国の日や勾玉掛けて畠に出る

建国の日や遠富士山に向かふ

辻井伸行のピアノ聴きをり建国日

光みち

ダウン着て若き女は雪を搔く
堂々と車道を突つ切る恋の猫
建国の日国旗掲ぐ家一軒あり
麓から神楽囃子や紀元節
バケツ下げ公魚釣りに氷湖に入る

小山陽也

暮れがたしふんちに糸の忘れ物
暗がりに童あふるる節分会

疲れたる日や公魚の南蛮漬

建国日有機農法講座あり

建国日クロス刺繡の展示会

立春に倒れし灯籠復旧す
二の午や幟は八本人四人
カイロ一個雨の鎌倉ただ歩く
巣作りのカラスシユロの皮を剥ぐ

今日の日ぞむかしむかしに国興る

青木啓泰

大寒の母の忌美しき夕焼空
餌パンを半分づつに春を待つ

嘉悦羊三

今朝獲れし公魚売りのマスクかな
夕星や公魚もどきチカ釣れる
解禁の公魚旨の中で選る

鰆酒をぐいと喉越し仮面ぬぐ
立春や海の匂ひの交差点ゼブランーン

ひしくいや建国記念日が来たる
建国記念日の切株で休む

倉田紀子

春の雲麒麟の虚空ありにけり
たましひの眠れる建国記念の日
公魚は凍てつくために釣られけり

伊藤一艸人

自転車でパン買ひに行く春の雪
二月の多喜へ宛てし直哉の書
ハンカチに餅菓子包む今朝の春
通院の夫の靴拭く沈丁花
箱書に志功の太字遅桜

吉羽多美子

黒豆をコトコトコトと一月かな
君が代を歌うてもみる建国日
早朝の公魚釣りの背固し

大寒やサハラとおなじカラカラ度
軒氷柱わが家の幸のすぐ消ゆる
冬苺甘味にとほしだがうまし
霜柱踏むために出る庭数歩
蠟梅を守りて四代花香散る

選句結果（数字は入選数）

高志 孝三 紀子 陽一
多美子 孝三 紀子 陽一
啓泰 一艸人 陽一 弥榮子
啓泰 一艸人 陽也 弥榮子
彰一 陽也 弥榮子

羊三 悅子
羊三 彰一
孝三 孝三
彰一 高志
孝三 紀子
高志 陽一
みち みち
陽一 陽一
みち みち
高志 高志
多美子 多美子
悦子 悅子
孝二 孝二
一艸人 一艸人
弥栄子 弥栄子
陽也 陽也
みち みち

ハンカチに餅菓子包む今朝の春

学食に公魚でんぶら出初めたる

夕星や公魚もどきチカ釣れる

疲れたる日や公魚の南蛮漬

早朝の公魚釣りの背固し

春の風邪蠶てふ虫の棲むと云ふ

建国日クロス刺繡の展示会

公魚の釣られて宙に透きほる

建国記念日遠富士をテラスより

霜柱踏むために出る庭数歩

今朝獲れし公魚売りのマスクかな

春の雲麒麟の虚空ありにけり

建国の日国旗掲ぐ家一軒あり

今日の日ぞむかしむかしに国興る

猫が道よぎる建国記念の日

大寒の母の忌は美しき夕焼空

バケツ下げ公魚釣りに氷湖に入る

マスクする人にはまれ建国日

冬苺甘味にとほしだがうまし

ひしくいや建国記念日が來たる

布施弁天一茶も見たる老椿

怖いなんてもう言わないで春の海

紀子

高志

啓泰

みち
多美子

彰一

みち
陽一

一艸人

羊三

悦子

啓泰

羊三

弥栄子

陽也

悦子

多美子

孝三

一艸人

啓泰

彰一

公魚の三匹釣れててんぶらす

一句一句鑑賞(12号分)

悦子

光成高志

羊三

悦子

たましひの眠れる建国記念の日

ベルグソン（一八五九～一九四一）によれば、肉体と精神は平衡していないと云う。過去の人の魂は存在していておかしくないことになる。日本の建国に係つた人々の魂に思いを致した作者の思いは日本人ならみな共感できるのではないか。これほどの長い歴史を持つてゐる我々日本人は、過去に思いを致し、古人の心を我が心として想像できる。古人の魂を我が物とする能力を持つてゐる。死者の魂は己の心に眠つてると感受した建国記念日であると作者が語りかけた佳句だと思います。

公魚は凍てつくために釣られけり

行為の未来を断定した言い回し、強引に思えるけれども、未來の挙動が読者を納得させるだけの写生が為されていると思います。穴釣りにより釣り上げられた公魚が氷湖の上でびくと跳ねたまま凍てつく様を目にしたことがあります。公魚の白銀の美しさが、あはれを誘います。それが、公魚の本領だと思います。

カイロ二個雨の鎌倉ただ歩く

陽也

寒中の鎌倉、カイロ左右につけて鎌倉をただ歩く作者の姿が目に具象化して飛び込んできます。うしろ姿のしぐれてゆくか、鉄鉢の中へも轟（山頭火）ほどではないにしても、ただ歩く作者の舞台が鎌倉であるだけに、先の羊三さんの句のよう、戦火に焼かれたたましひが後をついてきて、いよいよな凄まじさを感じます。

がくと肩こきと時鬼やらひかな

孝三

直ちに、鬼やらひわが体内の真暗がり（ひろし）を思い出した。この句にお目にかかる週始めに読んでいたお陰である。肩と肘の動きをオノマトペア（擬音語）にして、裏に諧謔を背負わせた老体の願望を照れ隠しにて述べた実感のある俳句だと思います。私の場合は、腰の鬼やらひかなです。小林秀雄は、年取たらいけません、といい、又若者に媚びることなく、年とつたら年とつたように考えなさいと、云う。NHKは腰を伸ばしてすいすいと歩けば、腰も膝も付き合つていけると云う。

通院の夫の靴拭く沈丁花

紀子

結「沈丁花」の季語斡旋が憎い。桜は春の表の顔、沈丁花は内の情。晴と穀（け：普段）、いづれも春の気息を肌身に伝え、両々春の花を代表する。沈丁花は、白と紅紫を交え、花容稠密、夕暮などの湿潤の気によく匂う。さて、年配になれば持病の一には当たり前、切迫の病証ではない。さりながら、いつも健康を気遣い合うのは夫婦の誠。通院、出掛けの靴の爪先の埃を払つてやる、ふとした所作に情愛の機微を見てとる。但し、只に老いの胸懷表白ではない。連れ添う日月をふり返り、かつ、いとおしむのである。即ち「沈丁花」の心延え。

建国日有機農法講座あり

みち

明治村行つたことなし雪が降る
今年は、全国的に記録破りの大雪である。東京や首都圏一円でも、何年かぶりに雪が積つた。さて、掲句、「あら、雪が降ってきたわ」ととつさに、草田男の代表句「降

る雪や～」を思った。とはいって、平成も二十年代半ば、いや、作者を含め殆どが明治を知らない。身の回り、明治を偲ぶよすぎがさえない。“そ、うよ、明治村にも行つた”ことがないもの。平明な口語調の詠い口がかえつて胸懐を深め、仄かな諧謔を漂わせる。中七「～なし」の切りあげの潔さが見せどころ。

故がきつかけの現代社会への反省も重なり、ふと後ろを振り返り、大事な置忘れに気づく。ところで建国日、どこの国でも建国を祝い、それに挺身した数多の先人に感謝し、併せて国土山河の恵みを讃えて、世の安寧と人々の偉を祈る。本来、日本でも同じ筈。さすれば、無縁に思える「建国日」と「有機農業」が深い所で繋がるのに気づく。客觀の「とば結」あり」が重く響く。

建国記念日の切株で休む

啓泰

一月十一日は、戦前の紀元節。建国記念日の名で復活

して何年になるだろう。ともあれ、切株は断絶の表象、

切断面が年輪を刻む。九・五・三音のチクハグが複雑な心情を窺わせる。結「休む」は、国の昔、今を振り返り、はた、訝る態であろうか。終止形が外連味ない。昭和の男は寡黙、それを地でゆく吟である。

辻井伸行のピアノ聴きをり建国日

高志

辻井伸行は一九八八年生れ、視覚障害をもつ新進ピアニスト。一〇〇九年、ヴァン・クライバン国際ピアノコンクールで邦人初の優勝。本人の天賦の才もさりながら、両親・家族・恩師ほかの人達の愛情と薰陶、そして何よりも自身の不斷の研鑽に負うものである。さぞ厳しい修練の連続だつただろう。全身を駆使したひたぶるの演奏が生

み出す美しい音色は心に入み、思わず肅然となる。時、恰も建国記念日、氏の演奏を聴き、ふと肇國以来の歴史を振り返り、時々の難局を乗り越えた先人達の劳苦へ思いを重ねるのである。

*昭和四一年(一九六六)制定された。紀元節は神武天皇即位の日である。

ハガキ句管見（第十二報）

飯田孝三

白鳥帰る村の鴉の知らぬ間に

敏子

春の村、鳥の主役が交替する。典雅、純白の巨花に忍まがいの黒装束どもが取つて替わる。「鴉の“知らぬ間に”は、あつという間の、村の変貌、ぶり／＼の作者の驚愕と、傍若無人、わが物顔で横行する鴉共の風態を二重演出する。白鳥の風雅の風はどこ吹いた。はたと出食わす、見張る目ん玉までもが目の当たりである。加えて、「村の」は、その全景を視野の中に、作者の心理と鴉の挙動の始終を同時展開させる映画技だ。高度のズーム・ワークである。「白鳥帰る」は、白鳥の帰翔の様ではなく、帰つてしまつた眼前の状景である。まだ紅の多き桜の五厘咲き

高志

ハガキ句十二報(06/3月)

菜の花や海に傾く開聞岳

おぼろ夜や乳房押し上げ湯の浮力

太田草の「和子の像」の絵を見で

いのちの絵祈りをつみ春立ちぬ

蜥蜴出て尾をするするとすると

竜天に登るお堂の天井画

白鳥帰る村の鴉の知らぬ間に

春耕の鋤より足のよく動く

ハガキ句12報をお届けします。先日、松戸にて

「まだ紅の多き桜の五厘咲き」という句を作り一人

悦に入つてましたが、今日はもう五分咲きとか、

花前線の速度にもいつも一驚しております。

孝三

妙子

百合子

高志

敏子

百合子

高志

敏子

が、旬日、万葉の桜となりふくらかに覆いかぶさる様が彷彿する。更に、「べにおほき」のイ音の鋭さを“さくら”的ア音で解放する青霞文藝も「曾へ」。

春耕の鋤より足

春、天地が動き

子供の頃、身近に

に対し、鋤は、手

畠を鋤く作業が

が小幅、小刻みに

き、とりわけ、「下

如実に見せる。春

の「」の一本絞

と追憶の目差しあ

れとも、旅先の宝

う。

ハガキ句14報(平成18年5月)

つなぐ手を強く握る兎風薫る

花塙町塙龍之介旧居跡

今更に牡丹咲ける夢ん中

花塙町塙龍之介旧居跡

今更に牡丹咲ける夢ん中

鉢立ちの桂若葉の四本立

雨あがる水川の杜の四十雀

雨粒の車窓を走るみどりの日

ざりがにの只ぶつぶつと子供の日

昇龍の高揚感と

滲む。読み方は、

れるだろう。後者

にもかかる。ぼく

花肩が町塙とともに旧居跡を染めている。龍之介

京下町情緒は即ち孝三さんの思いでもありますよ

図柄が見えない。

「五厘」咲きが面白。まだ紅を弛めぬ蕾の固さをありありと見せる。韻がいい。「りん」の弾む凜冽が春の気に添い、頭「まだ」と呼応して、満開の春への期待を高鳴らせる。「深き」、「濃き」ではなく、「多き」だ。数量感がヴィジアルである。「厘」は「輪」に通い、紅多き固い蕾のひとつひとつ

はなく、なにか具象の絵図ではないか。昇竜との思わぬ配合が諧謔を弾けさせる筈だ。

蜥蜴出て尾をするすると

高志

穴を出た蜥蜴の拳動、動作が眼前する。蜥蜴は瑠璃がいい。好くも悪くも、問題は、擬態音「するする」とするすると」だろう。ぼくには、常套で、常識を抜ける感興がいまひとつ。

臍夜や乳房押し上ぐ湯の浮力

妙子

至福、嘆息の量感。だが眞沢山。せいぜい「臍夜の湯の力」か。それでも、「押し上ぐ」は過多。拙「力」も蛇足だろう。そちら成ればいい句。でも、至難。肌は絹の簾越しか雲硝子の内のはどに。暴言ごめんなさい。
いのちの絵祈りをつつみ春立ちぬ

百合子

「和子の像」を知らないので、鑑賞の資格がない。ただ、絵の説明を出なし気がする。

お便り広場（到着順、敬称略）

白金葭新年号とハガキ句報ありがとうございました。璃子さんは九十歳?と聞きました。「・余生を引きずりて」の句、それなりの余生の人々がこの句会に参集されて共通のものがあるのではと感無量でした。私も私なりによかつたなあの余生を引きずりたいと願っています。我

孫子を茨城県として申し訳ありません。家内からもバカにされました。敏子さんのおかげです。ありがとうございました。（H.24.1.29小山陽也）

前略 大寒、お元気でお過ご様子お慶び申し上げます。白金葭一月号をお送り下さり誠に有難うございります。発行にかける貴兄の情熱に頭の下がる思いです。毎回出句のおすすめがござりますので、手許に書留めてあつた日常句をお送りしてみます。お役に立てば幸甚です。二月のは又お目にかかると思います。以上簡単乍ら御礼申し上げます。草々（H.24.1.28伊藤一艸人）
（耳の鳴りは一艸令さん矢箟にて会ふなかつた。真島）

冠省 果実白金葭の会会報平成二十四年度一月号確かに落手。ゆづくり読ませて戴いております。さて、唐突ですが、一身上の都合で会を退かせて戴きたくお知らせ致します。この一月から、所属する結社の同人として何かと雑用を仰せつかることとなり、この老骨に負担がかかることと相なりました。健康第一を心がけてまいりましたが、寄る年波には勝てません。従つて、態勢を縮小して俳句を愉しんで行く所存です。一年足らずのお付き合いでしたが、何よりも良き環境の中で句会文化を共有できましたこと心から感謝申し上げる次第です。これらの会の益々のご発展ご繁栄をこうから願つてやみ

ません。孝二先生はじめ連衆の皆様には何卒よしなにお伝えくださいるようお願い申し上げます。大兄には今後とも宜しく。失敬(H. 24. 1. 3-1 窪田空華)

白金葭一月号にて小輩の「亞」あいさつの拙文を好意的におとり上げ下さり、誠に有難うございました。恐れ入ります。さすが光成高志氏慧眼と心得、自らに鞭打つ思いです。毎々欠席投句お手数をお掛け致します。出席の諸氏によろしくお伝え下さい。後略

(H. 24. 2. 1-3 青木啓泰)

会費同封します。相変わらずの「古代」は別便。十五日の小豆粥、三日の節分は見事に忘れ、十六日に小豆粥を食べ、七日の夕方高さを低くした門松に粥を供へ夕方処分しました。

公魚ワカサギ全く読めずに苦労しました。もう少し一般のことを学ぶ必要がありますね。今年は初午が節分となり、二の午が稻荷祭りとなりました。数だけなんとかしました。(俳句略)

戦争未亡人の伯母の相続漸く銀行の連絡を待つだけとなりました。国、区、銀行、老人ホーム、弁護士の後見人等よくもこんなにだらしないことになったことを痛感しました。今日十四日小雨で幟が濡れています。明け十五日は一の午です。午前中は少なくとも十時頃迄雨がふ

らなければと願っています。皆々様の益々のご発展を祈ります。(H. 24. 2. 1-4 小山陽也)

*前略先日は大変お世話になりました。有難うございました。菅野様には五月十八日(金)五句出句後歎談とのみ記して置いたのですが、詳細は飯田様よりファックスでと書き添えました。三月中旬は御旅行ということも伝えました。お手すきになりましたらお願ひいたします。
(中略) 白金葭増田陽一樣、いんき壺あり、好きです。インクとはしない所が一工夫のようで…。冬尺取蛾ふゆしゃくとはおもしろいですね。悦子様、ボロ市本号の白眉と存じます。光成様、もてなしのビーフシュー、みち様背ナに物指し、もう追いつかないほど姿勢の悪くなつた私には身につまされる句です。彰一様1・2句英語してもおもしろそう。さすがですね。初句会、同じ化粧、正月も雀の餌、啓泰さんは少し遊びすぎでしょうか。でもこの傾向が大好きです。紀子様、ナースシユーズ。羊三様、レゲエの曲や寒桜「より」をどうしましようね。光成様の芭蕉の「かるみ以後」益々ですね。やはり猿蓑が最高ですね。おもしろいですもの。菅野さんの去来抄は毎回すこしづつ読みすすめていますが、少々「悪文」で読みづらい。まあマジメに伺つては居りますが。窪田空華句集「知音」抜粹句、私は大変好もしく読ませて頂きました。評

文の終わりの方が、わかりづらいのですが。スマゼン。巻末のみち様の一匁いいですね。走り書きで申し訳あります。(後略)飯田孝三様(H. 24. 2. 15小澤房子)

* 孝三さんから頂いた小澤様の手紙のコピーを無断で掲載致しました。菅野様には、事前にお目にかかるようとの孝三さんのアドバイスがありましたので、一度駒込の句会場までお邪魔する予定で居ります。その前に手紙にて、我孫子来場をお願いするつもりです。左の孝三さんの手紙により、四月九日五時にお伺いします(高志)。

先日はお世話になりました。いつも二面倒をおかけし恐縮しています。戴いた無患子の実、孫たちがたいへん珍しがり、また、妻は昔、実家の庭に生っていたとかで、懐かしいと喜びました。お礼申し上げます。

菅野先生の件について、「野火」の人達の句会参加、氏との面会(できれば懇談)の希望など、先日話し合つたあらましを、取り敢えず、小沢さんの耳に入れておきました。同氏の話では、第一月曜日の不釈句会終了後は、五時頃で、通常皆さんが即帰宅されるので、先生の時間をいただけるのではないか、とのことでした。なお、三月は、「野火」の記念行事の準備があり、忙しく、四月がベターの由です(小生もその方が好都合)。これらを含む本件の

ことで、小生がお役に立てることがありましたら、ご連絡下さい。(H. 24. 2. 20 飯田孝三)

受贈誌（1～2回目）

人形の髪風邪の子が撫でてをり(薊89号) 森下流子

芒原つぎつぎ老人出て来たり(リ) 澄田玄志郎

海鼠食ぶ残り時間を喰みしめて(彩103号) 平野ひろし

鬼やらひわが体内の真暗がり(リ) リ

髪をむんずと百円大根提ぐ(リ) リ

冴返る根元真白き老いの髪(リ) リ

虎落笛プロメテウスの深嘆き(リ) 河端不三子

皆既月食冬銀河煌けり(リ) 上田としだ

戦争の昭和往き抜き南瓜煮る(飛行雲61号) 駿河岳水

雛飾り泥つき真壁裏も売る(リ) リ

バレンタインのパート菓子添へ患者食(リ) リ

穂穂のそろはぬ丈に朝の雨(野火1月)

沼よりの光もらひて柿熟る(リ) 菊池芙蓉

無患子の落つる音なり授業中(リ) 萩原敏子

俳句評論纂

・タイ国北部山地蝶紀行(増田陽一)(雷魚89号)

陽一さん(夫)夫妻の若い時の(一九八八)蝶採集紀行

文が始まった。飛行機中で信州の温泉の熱を使って熱帯の蝶も飼育しているY氏夫妻と親しくなつたり、「中山蝶太郎」と高名な蝶屋西山氏などと同行、深夜のバンコックに着く。翌日にはもう、チエノマイ(飛び、ワイキヨウ)の滝に行って、腐ったバナナをトラップに使い、滝への流れに沿う水の上を、ウスキ蝶モンキ揚羽蝶類の飛びのを見る。

白い岩盤の上(これは石灰岩?)を滑つたり転んだりして網を振つて蝶を採集している陽一さんが、少年のように思えてくる。そういうほんとに俳味溢れるエツセイです。その時悦子さんはどこに居たのでしよう。(続く)ので次号を待つ。

・嘉悦羊三句集「山河の記憶」を上梓された。宮坂静生主宰の序文を基に、この句集をレヴューした。

さざなみの志賀や朝の諸子舟

好きな吟行地は、琵琶湖周辺と京都の路地。毎月通つて十年以上が経つた由。西陣の名和長年遺跡を見つけて、感涙に咽んだ由。これは羊三さんの先祖だとか。父上は、熊本で生まれ、旧満州、シベリアへ渡り、台湾に住みそで羊三さんは出生した。近江京近辺ばかりでなく、今回の句集では新しい試みがなされている。

戻り来る鷹や故国の青山河
天地の仄と十月櫻かな
逆さ寒蒸かし上りの草團子
季語が新しい。

更衣鴉天空を存分に

鴉は朱鷺のこと。美しいとされる鴉を存分に舞わせる更衣の羊三さんである。これからも想像されるように、ダンディな句を作られる方である。これからは、近江の安房の信州の熊本の山河を遍歴されて、新たな山河に向う。旅にある羊三さんの流離のはなやぎに山河がつき従つていくことであろう。白金霞に投句された句も掲載された。

龍天に登り海底軋みける 海猫渡る液化噴砂の埋立地

寒晴や壺中の天の無量光

羊三さんは書道家でもあられる。銀座での展示会にお伺いした時の書が「壺中の天」であった。本誌の題字も揮毫してもらつた。新境地への進展を期待しています。

芭蕉のかるみ以後（六）

光成高志

翁曰、当時の俳諧は梨子地の器に高蒔絵かきたること。していねい美をつくせりと雖も、やうやく飽之。予が

門人は桐の器をかき合にぬりたらんが如く、さんぐりと
荒びて句作すべし。

去来曰、桐の器をかき合にぬりたらんは、細工も塗師も一入手際顯ん。或人俳諧の新味を問ふ。翁曰、鴻雁の羹をすてゝ、芳草の汁をすゝれ。或曰、芳草の汁何ぞ鴻雁に敵する事を得んや。翁笑て答へ給はず。去来側に侍りて曰、宜なる哉、汝が鴻雁に飽ざる事。予いまだ汝が俳諧に暫くも住すべからず。住する時は重し。(去来、不

は魅力を感じないであろう。鴻雁の羹を捨てて、芳草の汁をすゝれといわれても、それを首肯できないのは無理のないことである。従つて、芭蕉は「翁笑て答へ給はず」であつた。去来はそれに対して、汝が鴻雁の羹に執着しているのは、汝が未だそれを食べていないからだと説明し、それを食べたい願望で一杯だからと言つてゐる。

去來の書簡を通して、芭蕉晩年の軽みの中身、また、軽みを希求するに至った理由がわかる。芭蕉は、世に行われている俳諧を梨子地高時絵に比し、自分の門弟らの進むべき道を、柿合塗に比している。また、従来の俳諧を鴻雁の糞に比べ、今後の風体を芳草の汁にも喩えている。何故そのように思うようになったか、それは、「ていね美をつくせりと雖も、やうやく飽之。」ためであった。昨日の吾に厭きた結果が、今日の軽みの提倡になつたものである。軽みは、芭蕉の老年に及んでの淡白さへの嗜好のもたらした新風であつたと結論してよからう。これは芭蕉自身の好みである。従つて芭蕉のような体験を積まない門人、すなわち、梨子地高時絵のような芸術美を尽し

「これらの点から考へると、軽みはある境地、即ち丁寧美を尽す境地に到り、それを十分味わい」なした後の作者に対し、いわば蕉門の高弟に対して、芭蕉が共に歩まん事をすすめた道であると考えてよい。初心者の最初から入るべき道ではない。そのために、初心から軽みに入つた者によつて、俳諧は救うべからざる堕落の道に進む結果になつたのであつた。軽みは従つて、蕉門の高弟どもがそれぞれに到り得ている境地に安住して、そこに尻を据えてしまつ事を救うがために、芭蕉の歩み始めた一歩であると考えるべきである。「俳諧に暫くも住すべからず。住する時は重し」という詞がこれを告げる。去来はこれを、旧染を洗うという語を以つて、不玉に説いてゐる。更に、丁寧に去来は説く。「軽の軽たるを知らずして、みだりに此れを好まば、卑薄に落ちん。薄と軽とは違ひあるべし。」

我孫子日記

1／20例会。新年会1／22日黒。1／25SOA。1／
28けやき。2／1SOA。2／4～6沖縄*。2／
7アビスタ。2／8SOA。2／10日本橋**。2／
やきプラザ。2／13我孫子。2／15SOA。2／17例
会。

* 砂糖黍煙の白穂高くして

高志

蝶々園 大胡麻斑蝶の群舞かな

みち

砂糖黍満載トラックまた通る

みち

泡盛の樽眠りをり初燕

みち

** 日本橋高島屋各行句会(萱)

みち

見るだけの束帯雛宮雛
浜名湖の水に浸して浅蜊売る

みち

風信子みもぐる妻でありし頃
立雛女雛は帶に包れて

みち

ひな飾りこほお江戸の日本橋

みち

初午や笙の音ほのか裏通り

みち

春光や越前和紙のタピストリー

みち

刺繡展見て春風の屋上へ

みち

敦子 // 順子 // 敬司 // 高志 //

原稿募集

句会報の中から一句一句選び鑑賞文を発行所まで、ハガキかメールにてお届けください。俳句特別作品は十句、評論、エッセイなど、又は季語に纏わる生活逸事などを書いてお寄せ下さい。当分十六頁中綴じ製本型で編集します。多ければストックして順次掲載します。

編集後記

今週から春めいた平年並みの気温になり、編集室の君子蘭の花芽が出来きました。春光がレースカーテンを光らせています。菜園の温床に種蒔きの時期になりました。パソコンに向い、早く済まして、畑に出ていますが、思つてゐることの半分も作業は進みません。急ぐなよそぐなよと何事も行つてますが、せつかちの地が出て困ります。今年の夏は、孝三さんの斡旋にて、「野火」の方々に会えることになりました。また、秋には、「彩」のひろし先生にも会いたく思つています。

日本橋慶喜の揮毫椿咲く
ハミングの春のネクタイ売場かな

良子 //

今脱ぎしやうに陳列春の靴
アマリリスそむきあひつつ凭れあふ

嘉男 //

五月兼題の「練供養」の取材の提案をしましたが、九品仏駅前浄真寺のそれはお盆の頃、三年ごとに行われ、次回は平成二十六年（二〇一四）とのことです。従って、兼題を変更して、同類の「祭」としました。再来年には九品仏練供養を見にいけることを祈念します。

今朝の新聞に陽一さんの名前を発見。左に案内しておきます。

「朝日チャリティー美術展」三月一～五日

・ 東京銀座の松屋八階10～20時

入場無料

・ 絆つなぐ1500点

・ 陽一さんの版画は4,5日です。

白金霞 第12号 平成二十四年一月発行

編集・発行人 光成高志（FAX 〇四七一八七一〇六八）

発行所二七〇一二一九我孫子市南新木一十四・十七

表紙の題字：嘉悦羊三。写真は白金霞

毎号「彰一英語俳句」を読むのが楽しみです。たいへん勉強になります。一例、第11号邦訳「寒明けてホップ・ステップ・ジャンピング」。まづ。御手許の同欄をご覧下さい。英原句頭“*I'm excited*”を削り、“～jump”を“a_jump”,末“spring sunshine”を“into spring sunshine”と添削、定着させる。とりわけ“into”を入れるあたり、ネイティブならではだ。一躍、リズムが弾み、春気溌剌。さらに、Teacher's comment 曰く、賢明なる読者に”*I'm excited*”は、言わずもがな。舌頭に千轉すべし、隈々いうに非ず、の訓を“地”で行っている。快哉。HAIKUに対する蒙を啓かれましたが、努々、俳句修行でも疎かにしまい。邦訳は「寒明けのホップ・ステップ・アンドジャンピング」だろうか。(Grimy Elephant)

彰一英語俳句(11号)

My HAIKU

I'm excited-
hop, step, and jump
spring sunshine

Teacher's correction

A hop,
step and a jump into
spring sunshine

Teacher's comment

By writing an excellent and lively
phrase: “hop, step, and jump” your
reader will know you are excited.